

詩歌・小説の中のはきもの (第29回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

279 私は、北海道ならば夏も冬も通して着れる間着の黒いセルを上着として間に合わせ、夏用として白いセルのズボンを穿き、白いズックの靴をはき、麦藁の堅いカンカン帽をかぶって、その旅行に出かけた。白ズボンに白靴をはき、麦藁のカンカン帽をかぶるのは、大正末年頃の中級の紳士の夏のイデタチとして、普通の形であった。

伊藤 整

★『若い詩人の肖像』から。かくも徹底的に夏の白靴が消えてしまったのは、実用としての白靴ではなく、ファッションとしての白靴だったからである。メッシュの靴は、舗装道路など歩くには熱気が直に入り込んでくるので、それほど涼しくはない。しかし、白靴の見た目の涼しさに敵う履物はない。他人の目に涼感を与える余裕を、現代人は失ってしまったということなのだろうか。

280 フリルトリボンのついたパーティー用の靴
底に鋼を打った作業靴
スニーカー ゴムぞうり オーバーシューズ
レインコートとおそろいではく長靴
ブロガン オックスフォード サテンのパンプス
タップシューズ 木製厚底靴
登山靴 ハイキングシューズ
サッカーシューズ スパイクシューズ
ぴかぴかのエナメル靴
冬用の毛皮靴
ローファー ラフ・アウト サンダル

スパッツ
ハイヒール ローヒール 厚底婦人靴
平底靴
モカシン 潜水用のフィンとフリッパー
シャワー用のつっかけ バレエシューズ
靴は無数にあるのに 一つだけない
これの片方が
シェル・シルヴァスタイン

★『天に落ちる (倉橋由美子訳)』の「戸棚は靴でいっぱい」。このように靴を羅列する詩は日本の詩人にもつくれるだろう。だが、最後へ行って片方の靴がないというオチをつけるといふ詩はつukれない。日本の詩人は真面目である。原語の詩は「駒下駄、高下駄、日和下駄」みたいな調子のよい韻を踏んでいるのだろうが、残念ながら訳詩ではそれが分からない。

281 昔、父が若い頃は、少しは財産もあったものですから、身なりなども整えていたらしいのです。けれども、だんだん生活が苦しくなってきたからは、床屋さんへも参りませず、髪は延ばしほうだい。着物なども、木綿の黒紋付の羽織を着ておりましたこともあり、それがいつしか羊羹色になってしまっているのを私はよく覚えております。また、出掛けるにも和服に深ゴム靴を履きまして珍妙なかっこうでとことこ出掛けていくのです。

牧野鶴代

★『牧野富太郎自叙伝』から。小学校中退で東大講師になった独学の植物分類学者。なりふり構わず95歳で没する晩年まで、現役であり続けた。娘鶴代が記録してくれて

いたため、こうして牧野愛用の深ゴム靴スタイルは後世に残った。

282 下駄を長く楽しむためには、はいた後のお手入れをかかさないと、とくに白木の下駄はお手入れを怠ると、すぐ足の指のあとがついてしまいます。悲しいことに。お手入れははいた日の翌日、汗の水分が少し飛んでから行います。まず、いらぬ歯ブラシで底や脇の泥や汚れを落とします。ぞうきんをぬらし堅くしぼり、電子レンジでチン。あつあつのぞうきんで白木の目にそってふいていきます。
森荷葉

★『和風えれがんとマナー講座』から。もうたいの親は自分の子どもに下駄の手入れを教えられない。保存の仕方や手入れ法や下駄の選び方を旅館の番頭さんたちに書いてもらいたい。なんと申したって旅館の関係者が日本の下駄の伝統を守っているのだから。

283 セミの鳴き声のほかに音はなにも聞こえなかった。短い廊下を玄関まで歩いた。コンクリートの三和土に、少年のスニーカーと、女もののはき古した白いサンダルが並んでいる。小さなゲタ箱のうえには、観葉植物の鉢が置いてあった。だらしなく伸びた葉の半分が茶色に枯れている。上り框に腰をおろして、スニーカーの紐を結んだ。

津島佑子

★『ナラ・レポート』から。情景描写で収まるべきところにスニーカーとサンダルがしっかりと収まっている。日本人作家の作品にはとって付けたように靴が出てくるものが多いので、これは珍しい。

284 「海辺で育ちましたか？」と、靴屋さん。「ええ、富山県で育ちました。海のすぐ近くではなかったのですが……」
「そうですか。魚をたくさん食べて育った人の足ですよ！」

宮部紀子

★『魚を食べた足』から。ハッターリじみて聞こえるが、実害がないなら、お客さんへのアプローチはいろいろあってよい。映画館の窓口で入場券を買うような事務的なやりとりでは、売る方も買う方も面白くない。映画は長くても3時間ほどの付き合いで終わるが、靴との付き合いは長いのだから、できればお客さんの心に沁みる言葉の一つも口にしたい。この人の場合、この店で誂えた靴は「四十年かかってようやくたどり着いた靴」だったという。靴屋にそんなつもりはなかったのだろうが、結果として意表をついたのが成功したのかもしれない。

285 もし持ってこれるなら、靴を何足かと、スリッパをシアーズ・ローバックから取り寄せて買って置いて下さい。こちらではとても高いですから。
ローラ・インガルス・ワイルダー

★『遙かなる大草原（田村厚子訳）』から。1915年、サンフランシスコで新聞記者をしていた一人娘ローズからミズリー州に住む母あての手紙。ホームシックにかかったローズは母に遊びに来てほしいと手紙を書いた。1879年、ローラは父の帳簿をのぞいて物の値段を記している。「ブーツ1足 4ドル40セント つなぎ服 1着 1ドル 小麦粉 1袋 3ドル10セント」、鉄道の工手は会社の建てた小屋に寝泊りして、1ヵ月食費込み4ドル80セントだったという。シアーズは通販会社。

286 靴は、こんな気持ちのいい日にこそスイッと買いたい。デザインの違いのシャープなものにも魅かれたけれど、残念ながら私のサイズはお取り寄せ。再び銀座に取りに足を運んで……などと、もたもたするのは今の気分には合わなかった。
平松洋子

★『買物71番勝負』から。雨は商売人泣かせである。私はサラリーマン相手の食堂が多い新橋で働いていたが、食堂の中には「雨の日サービス」と称して割引をしたり、一品菜ものを多くしたりする店がいくつかあった。靴店も雨の日は丁寧な接客するほ

か、靴クリームとか靴ブラシを奉仕するなどと工夫してみたらいと思う。照る降る関係なしという店には工夫がない気がする。

287 撫子に露みる朝の川原路わらの草履
のふみごちよき

尾上柴舟

★『更訂 現代文解釈法 塚本哲三』（昭和13年刊）に収められている一首。鑑賞にはこう書かれている。「夏の朝、撫子の花が露にぬれてある川原路、それは、『わらの草履』でこそ「ふみごちよき」に違ひない。私は子供の頃、よく斯うした路をはだして歩いたものだ。何れにしても涼しい感じをあるがまゝに歌った所が實にいい。」昔の受験参考書は余裕がありました。

288 「これはぼくの靴だ！ 自分で買って自分で紐を結んだ！」

なんてことを考えて一人で興奮し、妹に自慢したり母親に自慢したり犬に自慢したり猫に自慢したりした。あんまり嬉しかったので、その日は結局夜が更けるまで家の中でバスケットシューズを履いたまま過ごした。母親に叱られたので寝る前に一旦脱いだが、布団の中でこっそり履いて、そのまま眠りについてしまった。

原田宗典

★『わがモノたち』から。著者が靴の紐を結べるようになったのは小学校3年生、本格的に結んだり解いたりし始めたのは6年生の時だったという。紐を思うように結べるというだけで、靴の主人公になった気分になる。あれは嬉しいものだ。紐靴のセリングポイントに、大人になる通過点のあの喜びを訴求したらどんなものだろう。

289 一番嫌いだったのはバレエシューズと呼ばれる上履きだった。白いコッパンのような木綿の靴。小さな少女ならともかく、十六にもなった、しかも大足に、それはいかにもアンバランスで幼く、みっともないものに思えた。これは何とかしなければ……必死で考えた。すでに日々の「上級生観察」によって、上履き用にバスケットシューズを履いているひとがけっこういることに気づいていた。なんて大胆な……と最初は思ったが、一学期が終わる頃には学校の雰囲気にも慣れ、ようし、わたしもバッシュを履くぞという決意を新たにしていた。わたしが買ったのは真っ赤なバッシュだった。

光野 桃

★『妹たちへの贈り物』から。「ちょっと不良になったような、……冒険の胸躍る気持ち。一年生でバッシュを上履きにしているのはわたしだけ、という誇らしさ」「靴の側面にはサインペンで自分のイニシャルや好きな外人歌手の名前、ハートや星といったポップアート風のイラストを書き込んだ」と光野は言う。履物に「決意」まで登場するのが、高校生らしい。こんな気負いを聞かせられると「カワイイ」なあとつくづく思う。